STEP1 歴史的仮名遣い ―― 6つのルール

	ルール	例
1	語の**頭以外**の「は・ひ・ふ・へ・ほ」→「わ・い・う・え・お」	かたはら→かたわら　問ふ→とう　支へ→ささえ
2	「ゐ・ゑ・を」→「い・え・お」	まゐる→まいる　こゑ→こえ　をかし→おかし
3	「ぢ・づ」→「じ・ず」	もみぢ→もみじ　よろづ→よろず
4	「くわ・ぐわ」→「か・が」	くわし（菓子）→かし　ぐわん（願）→がん
5	母音が続く「あう・いう・えう」→「おう・ゆう・よう」（のばす音）	やう→よう　かう→こう　けふ→きょう　てふ→ちょう
6	「〜む」と読む助動詞など →「ん」	なむ→なん　行かむ→行かん

× まちがえやすい
「けふ」→「けう」で止める

○ こう考える
ルールは**順番に2回**使うことがある。けふ →（ルール1）けう →（ルール5）**きょう**。

× まちがえやすい
「全て平仮名で」なのに漢字を残す（謂ひて→謂いて）

○ こう考える
漢字の読みもひらがなに。謂ひて →**いいて**。設問の**「全て平仮名で」に線**。

練習　現代仮名遣いに直し、全てひらがなで書こう

	古文	答え		古文	答え		古文	答え
1	曰はく		**6**	こゑ		**11**	てふてふ	
2	謂ひて		**7**	用ゐる		**12**	まうす	
3	思ふ		**8**	もみぢ		**13**	くわじ（火事）	
4	あはれ		**9**	やうやう		**14**	行かむ	
5	をとこ		**10**	けふ		**15**	支へ	

読みのヒント：曰はく（いはく）、謂ひて（いひて）、用ゐる（もちゐる）、支へ（ささへ）、行かむ（ゆかむ）。

語の頭の「は・ひ・ふ・へ・ほ」はそのまま
「はな（花）」「ひかり」「ふね」は語の頭なので変えない。**「あはれ」の「は」は語の途中**なので「わ」。

STEP2 返り点 —— 「読む順番」を先に書く

返り点	きまり
レ点	**すぐ下の一字**を先に読み、レ点の字にもどる
一・二点	**二字以上**へだてて返る。「一」の字まで読んだら「二」の字へ
一・二・三点	「一」→「二」→「三」の順に返る
置き字	「而」「於」「焉」などは読まない（書き下し文に出てこない）

1 書き下し文を見て、漢字に**読む順番の数字**をふる

2 順番が**1字だけ**さかのぼる所 → **レ点**

3 **2字以上**さかのぼる所 → **一・二点**（先に読む方が「一」）

例　「易水を過ぐ」← 過易水

読む順：易①　水②　過③ →「過」は2字さかのぼる → 一・二点。先に読む「水」に**一**、あとで読む「過」に**二**。答え：「水」に**一**、「過」に**二**（過二易水一）

練習　書き下し文（左の小さい字）になるように、□に返り点を書こう（返り点のいらない□は空けておく）

1 読□書□　書を読む

2 不□知□　知らず

3 過□易□水□　易水を過ぐ

4 啄□其□肉□　其の肉を啄む

5 温□故□而□知□新□　故きを温めて新しきを知る

6 学□而□時□習□之□　学びて時に之を習ふ

7 両□者□不□肯□相□舎□　両者相舎つるを肯ぜず

8 己□所□不□欲□勿□施□於□人□　己の欲せざる所は人に施すこと勿かれ

5・6の「而」、8の「於」は置き字（読まない字）。

STEP3 主語と会話の範囲 —— 目印と現代語訳で決める

1	**「曰はく」「言ふ」「問ふ」**を見つけたら、その直後から**「と」**の直前までが会話。会話の中にさらに会話（『　』）が入ることもある
2	主語が書かれていない文は、**前の文の主語が続いている**ことが多い。会話のあとは、話し手が入れかわっていないか確かめる
3	【A】の文に番号をふり、**現代語訳【B】の同じ内容に同じ番号**をふる。【B】の「〜が」「〜は」が主語の手がかり
4	「主語」は**動作をする人**（〜が）。「これを」「之を」は動作を受けるもの（目的語）で、主語ではない

練習（『韓非子』より。会話のかぎ括弧を外してある）

楚人に盾と矛とを鬻ぐ者有り。之を①**誉めて**曰はく、吾が盾の堅きこと、能く陥すもの莫きなりと。又其の矛を誉めて曰はく、吾が矛の利なること、物に於いて陥さざる無きなりと。或ひと曰はく、子の矛を以て、子の盾を陥さば何如と。其の人②**応ふること能はざるなり**。

【現代語訳】楚の国の人で、盾と矛を売る者がいた。盾をほめて言うには、「私の盾のかたいことといったら、つき通せるものはない。」と。また、その矛をほめて言うには、「私の矛のするどいことといったら、どんな物でもつき通さないものはない。」と。ある人が言った、「あなたの矛で、あなたの盾をつき通したらどうなるか。」と。その人は答えることができなかった。

(1) 本文の会話の部分は三か所ある。それぞれの**初めと終わりの三字**を書きなさい。

1つ目 □□□〜□□□　2つ目 □□□〜□□□　3つ目 □□□〜□□□

(2) 下線部「之」は何を指すか。本文中から一字で抜き出しなさい。□

(3) ①「誉めて」、②「応ふること能はざる」の主語として最も適当なものを、次のア〜エからそれぞれ選びなさい。

①□　②□

ア　盾と矛を鬻ぐ者　　イ　或ひと　　ウ　盾　　エ　矛

(4) 「応ふる」を現代仮名遣いに直し、全てひらがなで書きなさい。＿＿＿＿＿＿

名前（　　）

三　次は、『戦国策』という書物にある話【A】と、その現代語訳【B】である。これらを読んで、後の各問に答えなさい。句読点等は字数として数えること。

【A】

趙且に燕を伐たんとす。蘇代燕の為に恵王に謂ひて曰はく、「今者臣来たるとき、易水を過ぐ。蚌方に出でて曝す。而して鷸其の肉を啄む。蚌合はせて其の喙を拑む。鷸曰はく、『今日雨ふらず、明日雨ふらずんば、即ち死蚌有らん。』と。蚌も亦鷸に謂ひて曰はく、『今日出ださず、明日出ださずんば、即ち死鷸有らん。』と。両者相舎つるを肯ぜず。漁者得て之を并せ擒ふ。今趙且に燕を伐たんとす。燕趙久しく相支へ、以て大衆を弊れしめば、臣強秦の漁父と為らんことを①恐るるなり。故に願はくは王之を熟計せよ。」と。恵王曰はく、「善し。」と。②乃ち止む。

（注）趙・燕・秦…中国の戦国時代の国の名。蘇代…人名。燕に仕えていた。恵王…趙の王。易水…川の名。
蚌…どぶ貝などの二枚貝。鷸…水辺にすむ鳥（しぎ）。臣…家来が主君に対して自分を指していう言葉。

【B】

趙の国が今にも燕の国を攻めようとしていた。蘇代は燕のために、趙の恵王に向かって言った。「今日、私がこちらへ来るとき、易水を通りかかりました。ちょうどどぶ貝が出てきて、日なたぼっこをしていました。そこへしぎがその肉をついばみました。どぶ貝は殻を閉じて、しぎのくちばしをはさみました。しぎが言いました。『今日も雨が降らず、明日も雨が降らなければ、死んだどぶ貝ができあがるだろう。』と。どぶ貝もまたしぎに言いました。『今日も（くちばしを）出さず、明日も出さなければ、死んだしぎができあがるだろう。』と。両者はたがいに相手を放そうとしませんでした。そこへ漁師がやってきて、両方ともつかまえてしまいました。今、趙は燕を攻めようとしています。燕と趙が長い間戦い続けて人々を疲れさせれば、私は強国の秦が漁師になってしまうことを心配するのです。どうか王よ、このことをよくお考えください。」と。恵王は言った。「わかった。」と。そこで（燕を攻めるのを）やめた。

（『戦国策』による。一部改変。現代語訳はこのプリントのために作成）

名前（　　）

問一　【A】の「合はせて」を現代仮名遣いに直し、全て平仮名で書きなさい。

問二　【A】の①恐るるなり、②乃ち止むの主語として最も適当なものを、次の1～4からそれぞれ一つずつ選び、番号を書きなさい。

1　趙　　2　蘇代　　3　恵王　　4　漁者

問三　【A】の「臣強秦の漁父と為らんことを恐るるなり」という書き下し文になるように、解答欄の漢文の適当な箇所に返り点を付けなさい。

問四　蘇代が恵王に鷸と蚌の話をしたのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の1～4から一つ選び、番号を書きなさい。

1　易水で見た珍しい出来事を、恵王に楽しんでもらいたかったから。
2　趙と燕が争い続ければ、強い秦に両国とも取られてしまうと伝えたかったから。
3　鷸と蚌をつかまえた漁師のように、恵王にも賢く行動してほしかったから。
4　燕の力は弱いので、戦えば趙がすぐに勝つと伝えたかったから。

問五　次の□の中は、【A】【B】を読んだ山本さんと川口さんと先生が、会話をしている場面である。

山本さん　鷸も蚌も、相手を放せば自分は助かるのに、どちらも「ア」という状態になってしまったんだね。

川口さん　そうして争っているうちに、漁師に両方ともつかまってしまった。蘇代は、この鷸と蚌を、イの二つの国にたとえているんだね。

山本さん　そして、漁師にあたるのが秦だね。蘇代の話を聞いた恵王は、そのことに気づいたから、ウことをやめたんだと思う。

先生　そのとおりです。この話から生まれた「漁夫の利」という言葉は、二つのものが争っているすきに、別のものが利益を得ることを表します。

(1)　ア　に入る内容を、【A】から八字で探し、そのまま抜き出して書きなさい。
(2)　イ　に入る内容を、【A】から二字で探し、そのまま抜き出して書きなさい。
(3)　ウ　に入る内容を、八字以内で考えて書きなさい。

実戦 解答用紙

問一	＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
問二	①［　　］　②［　　］
問三	□臣□恐□強□秦□之□為□漁□父□也□　　□に返り点を書く（いらない□は空ける）
問四	［　　］
問五(1)	［　］［　］［　］［　］［　］［　］［　］［　］　5
問五(2)	［　］［　］
問五(3)	［　］［　］［　］［　］［　］［　］［　］［　］　5

出す前のチェック

- 問一：**全てひらがな**か
- 問二：「臣」はだれのことか（注を見る）。②は、だれが何をやめたのか【B】で確かめたか
- 問三：読む順番の数字を先にふったか（臣①…）
- 問五(1)：かぎ括弧の中に入れて読めるか。ちょうど8字か

解答　STEP1〜3

STEP1

1 **いわく**　2 **いいて**　3 **おもう**　4 **あわれ**　5 **おとこ**　6 **こえ**　7 **もちいる**　8 **もみじ**　9 **ようよう**　10 **きょう**　11 **ちょうちょう**
12 **もうす**　13 **かじ**　14 **ゆかん**　15 **ささえ**

14「行かむ」は「ゆかむ」と読み、ルール6で「ゆかん」。「行く」は「いく」とも読むので「いかん」も可。

STEP2

1 読レ書　書を読む
2 不レ知　知らず
3 過二易水一　易水を過ぐ
4 啄二其肉一　其の肉を啄む
5 温レ故而知レ新　故きを温めて新しきを知る
6 学而時習レ之　学びて時に之を習ふ
7 両者不レ肯二相舎一　両者相舎つるを肯ぜず
8 己所レ不レ欲勿レ施二於人一　己の欲せざる所は人に施すこと勿かれ

8：己①所④不③欲②、人⑤施⑥勿⑦ ―― 「不」「所」と1字ずつさかのぼるのでレ点が二つ続く。「於」は置き字。

STEP3

(1) 1つ目 **吾が盾〜きなり**　2つ目 **吾が矛〜きなり**　3つ目 **子の矛〜ば何如**　「曰はく」の直後から「と」の直前まで。

(2) **盾**　直後の会話が「吾が盾の…」なので、ほめているのは盾。

(3) **①ア**　**②ア**　①は前の文の主語（鬻ぐ者）が続いている。「之を」は目的語。②の「其の人」は「或ひと」に言われた人＝盾と矛を売る者。

(4) **こたうる**（こたふる → ルール1で「ふ」→「う」）

解答　実戦

問一　**あわせて**　語の途中の「は」→「わ」。

問二　①**2**　②**3**

①「臣」は家来が自分を指す言葉（注）。この部分は蘇代の会話の中なので、「臣」＝話している**蘇代**。

②【B】「恵王は言った。『わかった。』と。そこで（燕を攻めるのを）やめた」→言った人が続けてやめている＝**恵王**。主語が書かれていない文は、前の文の主語が続く。

問三



読む順：臣①　強②　秦③　之④（の）　漁⑤　父⑥　為⑦　恐⑧　也⑨

「為」は「漁父」の2字をこえて返る→父に**一**、為に**二**。「恐」はさらにそのあとで返る→**三**。

問四　**2**　「燕趙久しく相支へ…臣強秦の漁父と為らんことを恐るるなり」（両国が戦い続ければ、秦が漁師のように両方を手に入れる）。3は「恵王に漁師のように」がちがう――漁師にあたるのは秦。

問五(1)　**相舎つるを肯ぜず**（8字）　【B】「両者はたがいに相手を放そうとしませんでした」に対応する【A】の文。「両者」を入れると10字ではみ出す。

問五(2)　**燕趙**　「燕趙久しく相支へ」。鷸と蚌（争う二者）＝燕と趙、漁師＝秦。

問五(3)　解答例 **燕を攻める**（燕を伐つ・燕を攻撃する も可）　【A】の最初「趙且に燕を伐たんとす」と最後「乃ち止む」をつなげる。

この大問のまとめ

主語は「〜が」にあたる人。会話の中の「臣」「吾」「我」は**話している本人**。**会話の範囲**は「曰はく」〜「と」。どちらも【B】の現代語訳と一文ずつ照らすと確実に決まる。